

日本体育学会
体育哲学専門領域
会報
Vol.24(1), April, 2020

記事

- ▷ 巻頭言
- ▷ 体育哲学考
- ▷ 書籍紹介
- ▷ 私の研究
- ▷ 特別寄稿 故浅田先生を偲ぶ
- ▷ 箱根合宿研究会情報
- ▷ 事務局より
- ▷ 専門領域代表から
- ▷ 次号予告！

巻頭言

社会の変化に翻弄されて

松本 真（埼玉大学）

この原稿を書いている時点（4月）、新型コロナウイルスの影響で社会状況は、二ヶ月前には想像すらできないほど大きく変化しました。その影響を私個人も大いに受けています。その際たるものは、大学でのオンライン授業です。対面の授業が当たり前、特に私は実技も持っているために、それ以外の方法を考えてもみませんでした。実技については今後どのようになるのかは、まだはっきりしていませんが、座学の講義では少なくとも前期は、オンラインが決定しています。そのため、急遽、シラバスを変更し、オンライン授業の準備をしています。その準備過程でいくつか考えたことがあります。体育哲学会報の巻頭言としては相応しくないかもしれないが、何を考えたのかについて若干、触れたいと思います。

パソコンを介してのオンライン授業をするに当たって、オンラインでのコミュニケーションがどのようなものか4月の前半に、ガイダンス、ゼミ、会議等で試してみました。最初の感想は、オンラインで使用するソフトは、かなり優秀であるというものです。特に、手軽さ、相手の顔が見えること、資料の提示のしやすさ、そして、双方向性という点についてです。しかし、同時に、違和感を感じたのも事実です。なんとと言っても、コミュニケーションをとる時の微妙なタイムラグです。相手が見えるので普通に会話をしようとするのとちょっとしたズレを感じてしまい会話がスムーズに行えません。例えば、質問をして、返答に窮している時のアドバイスをと思って声をかけようとする、行き違いのようなズレが永遠に生じて、逆に相手に意見を言ってもらえなくなることもありました。通常の会話とは、やり方を変えなければならないと痛感しました。

さらに、大人数（ゼミ等）をやっている時、場の雰囲気になかなか掴めないという違和感も感じました。私は、実技の授業も持っていて、大学生に挑戦させようとする時に、授業の雰囲気をいかに作るのかを大切にしています。その際に、単なる場を盛り上げるということではなく、具体的に何を学ぶのかという目標を明確にし、それに向かわせるための雰囲気を大切にしています。特に、私が専門にしているゴール型球技でいえば、どのようにやるのかという具体的な攻撃の型を提示してそこに向かわせるようにして、場の雰囲気を作っています。そうすれば、人間の好き嫌いではなく、チームとしての向かう方向が明確になり、それゆえにチームとしての場も作れるようになってきます。そのような場作りを応用して、座学の授業でも実践してきました。オンラインでは、このことを実現させようとする、かなり

の困難が予想されるし、さらにそのような場の雰囲気を感じられるかも疑問です。

しかし、現状ではこれらのことを克服して、なんとかしなければ、つまり、自分自身の認識を変えて、オンライン上で目指すべき事柄を明確にする必要性があり、そして、なんとか場の雰囲気を感じられるようにする方策を模索する必要があると思っています。

それと同時に、今後の社会、教育、体育、スポーツについても思いを馳せました。新型コロナウイルスによって変化した社会状況は、それ以前に戻ることはできないだろうと予測されます。つまり、社会のコミュニケーションがこれまでよりもよりオンライン上に移行していくことも予想されます。また、教育も、オンラインでの活用が増えてくると、従来の方法が再評価される一方で、さらに、新たなやり方が模索されると思います。そうなった時に実技も含む体育はどのような扱いになるのかを注意深くみながら、専門家として我々は声を発しなければと考えました。そして、全てが停滞した社会状況の中で、今後、スポーツがどのように扱われるのか、また、どのような意義を発信していくべきかを模索する必要があると感じています。

最後に、こんな時だからこそ、体育哲学がこの社会的な変化に対して何ができて、何を発信しなければならぬのかも問われている気がします。

松本 真 (mmatumot@mail.saitama-u.ac.jp)

体育哲学考

「噂」を考える

浦谷 郁子（中央大学）

「噂」は「本当なのか？」と疑いながらも気にしてしまうものである。例えば、新型コロナウイルスによりトイレットペーパーの輸入が減少するという「噂」が流れた。この「噂」は、信憑性がない中、SNSにより拡散し、多くの人が無くなりゆくトイレットペーパーを探し求めるといった現象が起きた。結果、多くの店舗でトイレットペーパーの品切れが起こった。しかし、新型コロナウイルスは、目に見えない恐怖であることは言うまでもなく、信憑性のある情報の有無を問うている場合ではなかったように思う。「噂」は、日常だけではなく、スポーツでも起こり得るものであり、新体操でも戸惑わせている。そこで、新体操の「噂」について考えてみた。

私は、定期的に新体操の審判業務を行なっている。主に東京都の大会に参加しているが、一年に一度実施される「カテゴリー認定試験」の結果によっては、関東や全国大会の審判依頼を受けている。審判をする時には、正確かつ迅速に審判することを心がけている。しかし、新体操の採点規則は 82 ページにも及ぶ内容が組み込まれている。審判員は、このページの他に毎年追加、削除されるルール変更も覚えておく必要がある。ルールを覚えると言っても、文章を覚えるのではなく、その文章に沿った難度や動作を想像できる状態にしなければならない。難度や動作の種類は多様であり、何種類存在するかもわからないものを判断しなければならない。実際に審判をしていると想像もしなかった難度や動作を実施する選手がいる。つまり、新体操の審判は、正確かつ迅速に難度や動作を見極める力を身に付けなければならない。

正確かつ迅速に難度や動作を見極める時に私たちを混乱させるのが、ルールに対する些細な認識の違いである。ルールに対する些細な認識の違いには、「噂」がもたらす混乱があるように感じている。新体操における「噂」の一例として、身体難度（ジャンプ、バランス、ローテーションのことを示す。分かりやすく示すと Y 字バランスなどである）を挙げてみたい。2017 年からの採点規則では、身体難度に許容範囲が定められた。基本的には 180°の開脚度があることが最も相応しいフォームとされている。基本となる 180°の開脚度から

- 10°落ちると（170°開脚）実施点から 0.1 減点，身体難度はカウントされる。
- 20°落ちると（160°開脚）実施点から 0.3 減点，身体難度はカウントされる。
- 30°落ちると（150°開脚）実施点から 0.5 減点，身体難度も無効となる。

2017 年の審判業務では，この 10～30°を見極めるのが，非常に難しかったのを覚えているのと同時に，見極め方が審判員によって違うことも多かった。特に，各都道府県の見解に違いが生じていたように思う。この見解の違いでよく耳にしたのが，「聞いたのだけど」という噂である。ルール改正から 4 年目となった今もなお，見解に幾らかの相違がある。

「噂」の良し悪しは，「噂」をどう捉えるかが鍵になる。「噂」に信憑性があるかを見極める，もしくは，偶然にも正しいことを示していた時には，有難い情報源になるが，「噂」の多くは，残念ながら信憑性がなく，誤った解釈で流れていることがある。近年は，SNS により数時間，数分，数秒で情報が拡散できることから，「噂」が一人歩きしていることがある。一人歩きした「噂」が，正解かのように伝達されることが混乱となり，問題を起こしているのではないだろうか。「噂」は，日常にも，スポーツ界にも様々存在するだけに，私たちがどのように捉え，掘り下げるかによって「噂」に意味をもたらすのかもしれない。

新体操の審判をする時には，事前に審判員宣誓をする。「私は，審判員の資格においてスポーツの品位及び誠実の精神をもってのみ行動すること，ならびに人物所属を念頭におかず，実施された演技を良心的に審判することを誓います。」この誓いの中には，「噂」を見極めることという意味も込められているのだろうかと考えさせられた。

浦谷郁子 (uratani@tamacc.chuo-u.ac.jp)

書籍紹介

チヨ・ナムジュ（訳）斎藤真理子（2018）

『82 年生まれ，キム・ジョン』 筑摩書房

新井喜代加（松本大学）

暖かな秋の午後，キム・ジョンは娘をベビーカーに乗せ，公園のベンチに座り，途中のカフェで購入したコーヒーで一息ついた。隣のベンチには同じコーヒーを手にするサラリーマン男性 2 人が座っていた。キム・ジョンは 2 人を眺めながら，自身が忙しく働いていた頃を思い出し，羨ましく思った。すると，その視線に気づいた 1 人がもう 1 人に話し始めた。「俺も旦那の稼ぎでコーヒー飲んでぶらぶらしたいよなあ……ママ虫もいいご身分だよな…」。 「ママ虫」とは，「育児をろくにせず遊びまわる，害虫のような母親という意味のネットスラング」であり，韓国では母親を害虫扱いする非常に侮辱的な言葉だという。その日から，キム・ジョンに母親や亡くなった先輩の人格が憑依するようになる。心配する夫は精神科医に相談し，彼女はカウンセリングを受けることになった。本書は，この診療録をもとに精神科医がキム・ジョンの半生を回顧する構成となっている。

キム・ジョンの半生は，ライフステージごとに女性が受ける偏見，差別，困難，理不尽な仕打ちを教えてくれる。例えば，キム・ジョンの中学・高校時代にあたる「一九九五年～一九九四年」の章では，服装規定における性差別について描かれている。ある日，スニーカーを履いて登校した女子生徒が校門の前で生活指導教員に捕まった。彼女は，なぜ男子にのみ T シャツやスニーカーが許されているのかと抗議した。するとその教員は，「男子は四六時中運動している」ことを理由に挙げた。女子生徒は「女子は運動が嫌いだからやらないとでも思っているのですか？スカートにストッキングはいて，靴まで堅苦しいのははいているから窮屈でできないだけです。私だって国民学校のときは，休み時間にいつも馬飛びや石蹴り

やゴム跳びやってみましたよ」と食い下がった。しかし、彼女は服装規則違反に加え、口答えをしたとして罰を受けた。

また、同章では「性にかかわるダブルスタンダード」についても描かれている。キム・ジョンは2年8組の女子クラスであった。ある日、同じクラスの不良5人組が学校周辺に出没する露出狂を取り押さえ、ロープとベルトで縛り上げ、派出所に突き出した。しかし、彼女達は謹慎処分を受け、一週間、授業を受けられず、生徒指導室で反省文を書き、グラウンドとトイレの清掃をした。その後、彼女達は廊下ですれ違った先生達に「女の子が恥ずかしげもなく、学校の恥だぞ、恥」と頭をコツンと叩かれていた。

シモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir) は、「男は人間として定義され、女は女性として定義される。女が人間として振る舞うと男のまねをしているといわれる。」と述べているが、キム・ジョンの半生はまさにこの名言を体現していると言っていいだろう。

繰り返すが、本書にはキム・ジョンの直面してきた困難が淡々と穏やかに描かれている。訳者の斎藤真理子氏が言うように、キム・ジョンの受けた困難を解決する「処方箋」は本書に記されていない。そのせいか、解説者である伊東順子氏が本書を「韓国社会における、過去から現在につながる女性差別の実態を告発した」「フェミニスト小説」というものの、それ程のインパクトを感じない。しかし、本書は終始、読み手の心をざわつかせる。静かに描かれた事象にリアルな統計数値や法制度等の情報が注として丁寧に記されているからだろうか。いつの間にかフェミニズムを学ばせる不思議な力を持つ一冊である。

新井喜代加 (karai5858@gmail.com)

私の研究

「内部者からの視点」からの体育授業研究

伊佐野龍司 (日本大学)

「今日の授業はハンドボールではなかった。」この実習指導教員によるフィードバックが、私の専攻を体育科教育学に決定づける一言であった。当該授業（平成11年告示の学習指導要領を使用）では速攻が頻発していたため、セットオフエンスから防御を突破し得点する局面を授業者が意図的に創出しなかったことが「ハンドボールらしさ」を喪失させていたとの評価であった。私の力量不足であったのはもちろんだが、生徒の現状から離れて、競技的側面の色濃いゲームに接近することが正しいのか悩んだ。ゲームで生じる課題の合理的解決方法（技術・戦術）は歴史的・文化的・社会的なプロセスを経て創出されてきたはずが、その過程は捨象され、あたかも既知かの様に全員に示すことは捉え直す必要があった。

このような問題意識において体育の授業研究に着手しようとする時、教師・学習者行動、指導プログラムの効率・有効性を検証することにもまして、むしろ課題と対峙した際の生徒や教師の相互作用によって生成される意味を読み解くことが重要であった。そのためには、価値中立的・要素還元的に対象を認識する方法は馴染まず、教師と生徒が「生きられる生活世界」に私自身も浸り内在的な視点から捉える方法が適していた。そこで、参与者と観察者の二重の立場による参与観察を小学校において1年半に渡り実施し、ボール運動（題材：セストボール）単元におけるフィールドノーツの記録から、パスの授受が行為レベルから役割の相互性を通じて当事者間の関係性の現れとして意味生成されたと解釈した。こうして授業を内在的に捉えることで、一見、非効率的な授業展開として捉えられるであろう授業内に生起する周辺的な出来事も、当事者の関係性や様々な意味の編み直しに関連することが詳らかになった。

こうした学校現場に身を置くことで、教師や生徒が織り成す意味や当事者の身体を考察し、そしてこれまでの見方を捉え直すことを試みることは今でも私にとって重要なライフワ

ークとなっている。現在は通信制課程（週に数日は登校するシステム）の高等学校の体育授業にて参与観察を実施している。在籍する生徒には様々な事情から他者との関係性構築が困難であるが、当該学校は身体を通じた交流を重要視しており、体育授業や特別活動は特段に力を注いでいる。今後は、体育授業を通じて教師、生徒の身体及び関係性の変容とその過程について記述・解釈した内容を論文として提出したい。上記が主たる研究だが、この体育授業研究を行う上で派生的に問題として浮上する、球技の指導内容の認識に関する研究や教員養成に関する研究も現在着手している。

体育・スポーツ哲学と私の関係に引きつくと、これまで体育学研究や体育・スポーツ哲学研究はもちろん関連した論文を拝読し、私なりに多くの学びを得ていたが、領域・学会に加入して日は浅い。当初の私は、専攻していないことを理由に勝手に不安を感じ、それこそ観客席にいる聴衆の一員ほどの立ち位置でシンポジウム等に参加していた。だが、偶然研修会で出会った先生に懇願して参加させていただいている原理研究会は、重要な学びの機会であり、楽しみの一つとなっている。特に、活発な議論の中に含まれている思考様式や問題を問題化するまでの思考や論理展開などは日々参考になっている。今後の目論みは、研究会で研究発表を試み積極的な批判・意見を受けること、定例研究会や学会大会以外のシンポジウムへの積極的な参加である。

予ねてより師は、自身の専攻から「旅に出ること」で研究を捉え直すことを指摘していたが、私自身、体育・スポーツ哲学の研究会等への参加を通じて、その言葉の重要性を身に染みて感じている。

伊佐野龍司 (isano.ryouji@nihon-u.ac.jp)

特別寄稿
故浅田先生を偲ぶ

追悼 浅田隆夫先生

許 義雄（台湾師範大学名誉教授）

日台断交 無事卒業

私は1971年に文部省（現：文部科学省）の国費留学生として来日しました。台湾で日本向けの奨学金制度を導入して以来、体育学では初の公費留学生だといわれました。台湾師範大学体育系の楊基榮教授の紹介で浅田先生の研究室で修士課程に進学しました。楊教授は浅田先生とは東京教育大学の前身である東京文理科大学では同期でした。教授は留学前にわざわざ浅田先生へ手紙を送ってお願いしてくださいました。

実際、私は来日前に台湾師範大学で3年間助手を務めていました。一男一女をもうけて家族を築き、妻は同じ大学で勤務していました。この時は一人で日本に行きましたので家族を捨てたも同然でしたから、気持ちが全然違いました。

4月5日午前10時、同時期に公費で留学していた他の台湾人学生16人共に日本航空のフライトで初めて日本にやってきました。1970年代の台湾は政情が不安定で、台湾の学生が海外へ留学することは容易ではありませんでした。特に私は一般の師範学校を卒業し、小学校で4年間教鞭を執った後、助手として大学院に進学したものの、家庭環境ゆえに一人で留学することは並大抵ではありませんでした。しかし、幸いにも公費留学でしたから家族の負担が減り、みんなの羨望の的になるような貴重なチャンスでしたので、家族は私の決断を尊重してくれました。

来日後、浅田先生と初めてお会いしたのは、4月8日（木）午後3時、幡ヶ谷の体育学部キャンパス3階の第1講座（体育原理と方法論）の研究室でのことだったと記憶しています。非常に忙しい様子の浅田先生は、私が来るのを確認されると、頭を下げて丁寧に挨拶され、

先にソファに座るように言うてくださいました。標準的な体型で少し痩せていましたが、足腰がしっかりしていて、未完成な仕事に追われていることを自覚されていました。研究室の女性の助手がお茶を持って入ってきたのですが、その時に浅田先生が事務用デスクから立ち上がって、私に弘中栄子先生だと紹介してくださいました。浅田先生のお話では、今後私はまず半年間は聴講生であり、10月の大学院の入試に合格して初めて正式に修士課程の学生になるとのことでした。私は頷いて「はい」と答えました。浅田先生は笑顔ではなく、どこか厳肅な様子でした。



続いて浅田先生は「何か困ったことがあれば弘中先生にお願いしてください」とおっしゃって、話が終わると向かいの席に座り、日本での日常生活についてお聞きになりました。

私は一つ一つ質問に答えました。文部省が提供している東京大学駒場キャンパス前の留学生会館に滞在していて、3階建ての会館には10~15数か国の合計150人程の留学生が生活し、学生寮や食堂、閲覧室、談話室などがあり、とても便利なことを伝えました。少し会話を交わした後、弘中先生の案内で1階の学生課の中村さんに会いに行き、入学手続きを完了しました。

修士課程入学試験は10月上旬でした。試験前に概要を確認すると、体育学科目の他に、外国語科目にはドイツ語と英語があり、第一外国語と第二外国語に分けられていました。受験生は試験の順番を選択できますが、第二外国語は辞書の持参が可能でした。日本に来る前から、入試を受けなければならないことは知っていましたが、2か国語を受験しなければならないことを知りませんでしたので、少し面を食らいましたが、特に異議を申し立てることはありませんでした。ただ、英語は勉強すればなんとかかなりでしたが、ドイツ語は今まで勉強したことがなく、半年後の受験に少し不安を感じました。

実際には、物事が頭をよぎった時にはただ呆然としました。聴講生になってからは、体育学の講義を受講するほか、ドイツ語の辞書やドイツ語テレビのテキストを購入して、NHKのドイツ語初級講座を聴くようにしました。また、東京教育大学の犬塚キャンパスへ決まった時間に電車で通学し、ドイツ語初級講座を聴いていました。7月中旬になると友達が私に、留学生ならもしかして日本語を第一外国語かに選択できるか教授に相談できるかもしれないから、第二外国語に英語かドイツ語を選択すればいいと教えてくれました。いつも厳しいと思っていた浅田先生なら同意されないかもしれませんが、状況が差し迫っていたので、無理にでも頭を抱えて研究室に入っていました。

相談した結果、浅田先生は大学の入試規定についてご質問されました。私は、入試要項には外国語は2言語の試験が必要ですが、外国人留学生には特別な規定がないことを伝えました。母国語である中国語の他に、日本語を第一外国語とし、英語を第二外国語に選択できないか伺いました。浅田先生は考えた末、私の提案に反対しませんでした。

合格発表後、幸運にも佐藤臣彦さん、遠藤卓郎さん、松原周信さん、FUKE（ブラ



ジル人)さんの5人とともに浅田研究室入りすることができ、大変光栄でした。しかし、現実の国際情勢は台湾にとってかなり不利なものでした。1971年10月25日、中華人民共和国が台湾国民政府に代わって国連に加盟し、翌年の1972年9月29日、日本政府の田中角栄首相が台湾国民政府との国交断絶を宣言しました。その結果、留学のための奨学金が存続されるのかすぐに不安を感じました。10月のはじめ、私は悩んでいましたが、弘中先生が広島病院から激励の手紙を送ってこられ、「研究の仕事が終わるまで日本にいられる」と説明を頂きました。この事はもしかしたら弘中先生が浅田先生に相談して下さったのかもしれませんが。その後、浅田先生は私が安心して研究に専念できるように、奨学金の申請書と推薦状を期限内に準備するようと言ってくださいました。

こうして、必要な単位を無事取得し、修士論文の口頭試験に合格後、台湾へ帰国して台湾師範大学で教鞭を執りました。浅田先生にはお世話になりっぱなしでした。同研究室の片岡先生や広中先生にもお世話になり、多くの学生も助けてもらいました。この御恩は一生忘れることはありません。

経師易得、人師難求

1970年代の日本には東京教育大学を除き、体育学の修士課程を設けている大学院はありませんでした。修士課程は修業年限が最低2年と規定されていましたが、浅田研究室の修士学生は皆が卒業までに4年かかることを覚悟していました。しかし、浅田先生は開放的な指導スタイルで、各授業の点呼以外は特別な要求をすることはありませんでした。課題報告の時間になると、皆共に頑張ってくれて、先生と学生の関係もとても良好でした。そのため、授業後は研究室でコーヒーを飲みながら、授業で触れなかったことをディベートすることがよくありました。

1973年末、公費留学も3年目に突入し、すべての単位の取得を終えようとしていた頃、「森有礼の体育理念に関する研究」という修士論文を執筆し、浅田先生からご意見を伺いました。私は、台湾の体育・スポーツの政策や方向性を理解するために、日本留学を希望した当初の目的通り、現代台湾の体育・スポーツに影響を与えた日本の明治維新期の体育を研究したいと伝えました。浅田先生は私の意見にはすぐに返事をされることはありませんでした。少し間を置いてから、日本では森有礼を研究している論文が非常に多いから、もっと情報収集を行い、論文を新しいものにして新たな見解を発表すべきだと助言を頂きました。

もちろん私は努力を尽くし、1974年2月にやっと修士論文が合格しました。修正もあまり求められませんでした。私も安心して台湾に帰国することができました。

5月に日本体育学会の年会で発表したい論文のレジメを台湾から送り、発表会に参加する旨を伝えて浅田先生に査読をお願いしました。浅田先生から、題名から内容まで、細かい修正意見を加えた分厚いお手紙を頂くとは思いませんでした。浅田先生は、内容は大体問題ないものの題名を「中華民國の近代学校における国術の史的原理的考察」に変更すべきとおっしゃいました。驚きはしましたが、元々体育原理を専門としていましたので、原理的な批判的論述があれば、もっと論理的になるということも理解していました。浅田先生は本当に「外見は穏やかながら、話を聞いていると凄みを感じられる」という古書に描かれているような方だとふと思いました。つまり、厳しそうに見えて、接してみるととても温厚な方でしたが、原則的な問題になると、先生のお話はとても厳しいものでした。「経師易得、人師難求」の道理、すなわち理論を教えられる先生は少なくありませんが、自分の言葉を実践して、お手本にして教えられる先生は少ないということを認識しました。幸いなことに、浅田先生のもとで体育原理を専攻することができ、台湾へ帰国後も、大変役に立ちました。先生に心より感謝いたします。

先駆者：前に進めば、痕跡は必ず残る

浅田先生は生涯に何度も台湾へお越しになりました。プライベートな旅行のほか、日本女子バレーボールチームを引き連れて台北での親善試合への参加をはじめ、台湾主催の国際体

育学術会議に出席、日本代表団の団長、基調講演など精力的に活動されていました。先生を招待した団体・機関の中には、文部省のような公的機関、中華民国体育学会、全国大專院校体育総会などの民間の体育学術団体がありました。1975年8月、浅田先生は、江橋慎四郎先生、飯塚鉄雄先生、菅原禮先生、古藤高良先生とともに、アジア太平洋地域の体育・スポーツ健康とレクリエーションに関する国際シンポジウムに招かれ、「日本国民ためのスポーツ振興の基本原則」を発表されました。1977年、当時台湾文部省体育局長だった蔡長啟先生に招かれて台湾の学校へお越しになり、台湾の社会体育について講演されました。蔡局長は、1966年に台湾政府の公費で1年間日本へ留学し、東京教育大学体育学第一講座の前川峯雄教授の指導を受けました。浅田先生とは師であり友でもあり、常にお手紙でやり取りをしていました。台湾文部省は1978年から国民体育・社会体育政策を積極的に推進しており、浅田先生の人脈を通じて、日本の専門家や学者を台湾に推薦し、国民体育・社会体育に関する講習会を開催しました。

1980年、浅田先生は台湾に招かれ、FIEPの国際会議に出席されました。同会議は圓山大飯店で開催され、謝東閔副総統が開会の挨拶を行いました。ヨーロッパ、アジア、アメリカ、アフリカなどの国や地区から合計50か国250人以上が出席しました。浅田先生は「80年代の求められる必要な資質の体育教授モデルについて」をテーマに発表されました。閉会后、浅田先生は感謝の言葉で次のように述べられました。「1923年の第1回FIEP国際会議以来、これほどまでに準備を整え、巨額を投じ、出席者全員に恩恵を与えた国は他にないと思います。そして、参加者はこの姿勢に深く感動しました。アジア諸国は民族、文化、領土、地理風土、考え方が似ていることから、アジアからの出席者である私たちが一致団結して、アジアの体育・スポーツ文化の発展と交流のため、その組織設立と運営に尽力していきたいと思っています。」

浅田先生はこのような理念を掲げて1982年には、辻野昭先生、高橋健夫先生、荘司正徳先生、藤田邦彦先生、入口豊先生、梅野圭史先生ら日本代表団の中、小学校・高校体育教師21名を率いて、台湾・日本・韓国で開催される東北アジア体育大会に参加されました。1992年には、台湾大專校院体育総会主催の「国際スポーツ科学会議」に、日本スポーツ教育学会副会長の片岡暁夫先生をはじめとする17名の専門家・学者と共に出席しました。1990年10月には、浅田先生と福島大学の森知高教授を招いて韓国で1週間の集中講座を開講しましたが、これは体育に関する専門知識の伝播であるだけでなく、アジアの体育界の交流と発展にも大きな意義があったと私は信じています。

1987年の筑波国際会議開会の際、浅田先生が同様の理念で自ら前述の蔡局長に呼び掛けて、韓偉教授（陽明大学学長）、謝孟雄教授（台北医学大学学長）、李叔佩教授（台湾師範大学健康センター主任）、呉萬福教授（国立台北教育大学体育学系主任）と筆者が会議に出席しました。台湾が国際的な体育学の中になるきっかけになっただけでなく、国際協力や交流のプラットフォームとして、健康レジャーとスポーツについての世界共通のビジョンを打ち立て、またこのような会議を開催してほしいと思いました。特に1990年12月には、日本スポーツ教育学会発足10周年を記念して、会長として国際体育・スポーツシンポジウムを開会しました。国際高等教育体育協会秘書長のピエロン教授、中国から楊文軒教授、林笑峰教授、そして、台湾から簡曜輝教授と筆者が出席しました。情報交換の架け橋となって友好を深め、非常に重要で意義深い会議となりました。

家族への愛 強い責任感

浅田先生は夫としての責任感が強く、ご家族への面倒見が良いことで知られていました。奥様がお亡くなりになると、奥様のために遺稿を出版され、話題になりました。浅田先生は、1992年に台北大專校院体育総会主催の国際スポーツ科学シンポジウムに特別に招待され、講演を行われました。浅田先生は自ら講演内容を準備され、自ら開会式に参加して、専門論文の発表を予定されていました。しかし、ご夫人が体調を壊され、とても自ら発表できる状態

ではなかったため、他の方に台本を読んでもらうことになりました。

実際、浅田先生は1992年6月17日に私に宛てられた手紙の中でこうおっしゃっていました。「家内が不調のため、家を空けることが出来ず心肺機能をはじめ、胃腸の機能が衰え、一寸動くと胸が苦しくなり、体全身に不快感が生じ、いてもたってもおれない状態になります。その程度に応じて 精神安定剤のような薬を何種類か投与しています。精神安定剤を飲むと、その副作用が体に影響を及ぼし、不快感がさらに高まるといった状態で、病名がはっきりとしない……これまた食事がさっぱり進まない……全く始末の悪い病気です……。栄養をとることが最も大切なことですから、それだけに私も大変です。私がないと……その準備に苦労します……。」

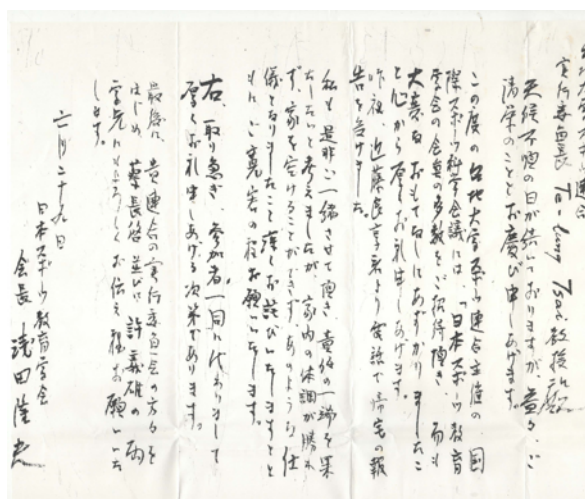
先生が奥様と仲睦まじいこと、先生が奥様の病状をずっと心配されていたこと、薬の影響、食事すらできないということが手紙から十分伝わりました。ご高齢の先生がさぞお辛い様子であったことが手に取るようにわかりました。先生は責任感が強い方でしたので、日本スポーツ教育学会の代表団が台北国際会議に出席することも大切にされていました。責任感ゆえに、自ら会議に出席できないと申し訳なく感じられ、6月29日に欠席によって迷惑をかけるという内容の手紙を大会主催者へ自ら送られ謝罪の気持ちを伝えられていました。浅田先生の常に尊敬されてきた自分に厳しく、他者に寛容な人柄が見られました。

東京教大台湾同窓生恩師のことを忘れません

台湾の東京教育大学体育学部の卒業生は、日本へ残る人、海外へ移住する人もいますが、台湾在住の同窓生は政治、実業界で活躍している他、台湾の各大学で教鞭を執り、皆がそれぞれ積極的に活躍していて、その功績は社会から認められています。

浅田先生が1983年3月に退官後、4月に台湾へお越しになった際、台北アンバサダーホテルで東京教育大学体育学部の同窓達が懇親会を開きました。会場には蔡長啟（体育原理）、劉錫銘（運動学）、呉萬福（運動心理学）、曾博文（体育社会学）、黄彬彬（運動生理学）、戴智權（体育原理）、沈茂雄（健康科学）、許義雄（体育原理）、邱金松（運動管理）、江再郷（体育原理）、張擲英（体育原理）、杜登明（運動生理）、朱敏進（特殊体育）、王富雄（体育原理）、李正美（体育原理）の計15名（敬称略）の同窓が出席しました。また、浅田先生から専門講座で直接指導を受け、日本滞在中に先生から大変お世話になったこともありましたので、先生への感謝の気持ちを込めて、共同で「師恩難忘」と先生のことを一生忘れませんという意味の言葉を刻んだ銀皿を製作しました。

時は流れ、先生がこの世を去りました。故人を偲んでいると、悲しみに押しつぶされてしまいます。在りし日を思い出しながら、本文を執筆致しました。



許 義雄 (ihsiung.hsu@msa.hinet.net)

これまで19年間に渡り、夏期合宿研究会の会場として利用させていただいていた「強羅静雲荘」が残念ながら閉館となりました。それに伴い、運営委員会で検討をした結果、金額・アクセスを鑑み、このたびリニューアルした「国民宿舎 箱根太陽山荘」にて実施させていただく運びとなりました。1999年まで体育原理専門分科会(当時)の合宿研究会で利用していたお宿です。その当時の様子を懐かしく思い出される先生方もいらっしゃるのではないのでしょうか。また、期間は秋シーズンに移行しての開催となります。

本年度は下記の要領で合宿研究会を開催します。今回も連休に重ねて土日・祝日(敬老の日)の日程で組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。

期日：2020年9月19日(土)、20日(日)、21日(月・祝日)

場所：国民宿舎 箱根太陽山荘

(住所) 〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1320-375 (電話) TEL.0460-82-3388
小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり左手に/ケーブルカー脇の坂道を約50m登った右手にあります。

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)(*は運営委員会)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20時
19日(土)						受付	研究会①					夕食		
20日(日)	朝食	研究会②			昼食*	研究会③						懇親会		
21日(月)	朝食	研究会④		事務協議	解散									

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。大津 otsu@tokai-u.jp までよろしくお願いたします。

☆費用：27,000円程度(予定)金額は変更になる場合もあります。

- ・研究会参加費：3,000円
- ・宿泊費等：24,000円(全日程参加の場合/2泊朝夕食、懇親会費を含む)
- ・中日の昼食代は別途1,500円
- ・学生、院生、研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆5月29日(金)必着にてお申込み下さい。

3ヶ月前には宿へ予約を入れねばなりません。人数把握のためにご協力ください。

- ・Eメール：お名前、ご所属、連絡先、発表の有無、宿泊のご予定(食事の有無を含む)について、東海大学 大津(otsu@tokai-u.jp)までお知らせください。
- ・特に、部分参加の場合は、宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。[19夕食、19宿泊、20朝食、20昼食、20夕食、20宿泊、21朝食]
- ・参加予定に変更が生じた場合は、速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・キャンセル料については、10日前までにご連絡がない場合は、予約金がキャンセル料となります。宿泊前日は宿泊料の50%、当日は宿泊料の全額がキャンセル料となりますので、ご留意ください。
- ・不参加の方で近況報告をいただける方は担当者までご連絡下さい。

☆詳しい「プログラム」は、9月中旬にお送りする予定です。

☆新型コロナウイルスの影響により中止になる可能性があります。キャンセル料が発生するまでに実施可否の判断を致します。

合宿研究会担当運営委員：大津克哉

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 体育学部 スポーツ・レジャーマネジメント学科

E-mail: otsu@tokai-u.jp Tel: 0463-58-1211 (代表) Fax: 0463-50-2056

(お問い合わせは、なるべく E-mail またはファクスをご利用下さい。)

事務局より

高岡英氣（敬愛大学）

○ 2020 横浜スポーツ学術会議について

2020年9月に開催予定の「2020 横浜スポーツ学術会議」につきまして、同組織委員会では、新型コロナウイルスの影響を踏まえ、オンラインを含む形式での会議の一部開催について議論を進めているとのことです（2020年4月27日現在）。参加予定の方は引き続き公式HP等で情報をご確認ください。

公式HP：https://yokohama2020.jp/jp/index_jp.html

○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、事務局 (bureau@pdpe.jp) までご一報ください。また、メーリングリストに登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。こちらも事務局 (bureau@pdpe.jp) までご一報ください。

専門領域代表から

関根正美（日本体育大学）

例年5月下旬から6月上旬に行っている第一回定例研究会につきましては、COVID-19の影響を考え、9月以降に開催する予定で企画を進めております。ただし、場合によっては健康上の理由や各大学の学事日程などの影響により、やむをえず中止する可能性もあります。箱根夏期合宿につきましては、現在のところご案内通り9月に実施する予定ですが、これにつきましても今後の事態の変化を見ながら運営委員会にて実施の可否を検討することもあります。

いずれにしましても、運営委員会では会員の皆様が不利益を被らないよう、決定事項を速やかにお伝えするようにいたします。会員の皆様におかれましては、社会的にも精神的にも厳しい状況下ではありますが、それぞれの事情の下でできる範囲で研究成果の蓄積をお願い申し上げます。

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：田井 (tai@gunma-u.ac.jp) までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第 24 巻第 1 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
関根正美（代表）
編集者 田井健太郎, 佐々木 究, 阿部悟郎（広報担当）
発行日 令和 2 年 4 月 30 日
連絡先 〒263-8588
千葉県千葉市稲毛区穴川 1-5-21
敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付
電話：043-251-6363（代表）

【編集後記】

新型コロナウイルスの惨禍が止まりません。亡くなられた方々のご冥福と罹患した方々の一日も早いご回復を心よりお祈りします。

今夏に控えていた東京オリンピック・パラリンピックも異例の延期となりました。国内でも各地でクラスターが発生しています。残念ながらそのうちのいくつかはスポーツ活動に関わるものとなっています。学校教育の現場で実技を担当されている方もおられるかと思いますが、感染拡大を押しとどめるために一層の知恵と努力が求められます。衆知を結集し、なんとかしてもこの難局を乗り越えましょう。引き続きのご自愛をお願い申し上げます。(S)